

## 南都淨土教に於ける智光の地位について

滝 安 雄

### (一)

日本淨土教思想の展開に於て、その主流的展開となつた「叡山淨土教」の系統の外に、南都を中心として発達した所謂「南都系淨土教」真言密教の内に興起した「密教系淨土教」のある事が伺はれるのであつて、これ等の三系統を体系的に整理研究する事に依つて、法然淨土教思想成立までの思想的関連性及び、その思想の独自性、思想的根拠等幾多の研究課題を包含しているのである。

本稿に於ては、その三系統の内特に南都淨土教の体系的研究の一過程として、何人にも注目されている元興寺智光についてその論を進めて行きたいと思う。

さて、本問題研究に於て、注意すべき事としてこの「南都系淨土教」の展開にも又、三系統が見出されるであらう、即ち、その代表的人師の著書を挙げると、

- (一) 三論系淨土教 智 光 「無量寿経論釈」五卷<sup>①</sup>
- (二) 法相系淨土教 善 珠 「無量寿経賛抄」一卷<sup>②</sup>

「無量寿経註字釈」一卷<sup>③</sup>

三 華嚴系浄土教

智 憬 「無量寿経宗要指事」一卷<sup>④</sup>

「無量寿経指事私記」一卷<sup>⑤</sup>

であつて、この内三論系が早くから發展しているのである。これは如何なる要因に基くものであろうか、かゝる問題として次の事が考へられる。即ち、

(一) 宗派的仏教の内、三論宗が最も早くから伝来していること、これに関連して注目すべきは既に宮中に於て「無量寿経」が三論系、僧慧隱に於て講経されていることをみる事が出来る。<sup>⑥</sup>

(二) 三論宗の開祖嘉祥大師吉蔵 (AD 549 ~ 623) に

「無量寿経義疏」「観無量寿経義疏」等の如き浄土経に関する論著がある事<sup>⑦</sup>に依つてもその一端が伺へるであらうか、かゝる三論系に於て、先ずその浄土教思想を論じたる智光のその教学的地位について概略したい。

## (二)

先ず、智光の伝歴に就いて一言するに、その在世年代は、元明天皇和銅元年 (AD 708) ~ 宝龜年間 (AD 770 ~ 780) あつてその生涯は奈良時代全般にわたつてゐる<sup>⑧</sup>。そして智光は三論の学匠であつた事は三論宗系諸傳に見へているから、こゝではその詳細については論ずる事をさしひかえるが図示すると

嘉祥寺—吉藏—慧灌—福亮—智藏

道慈（大安寺流）  
智光（元興寺流）  
礼光

となり、智光の師を智藏となつてゐるが、これに就ても尙問題があるが、ともかく三論宗の系統であつて、嘉祥大師吉藏系である事は、慧灌福亮共に吉藏より三論の深旨を受けた事が明かである。又智光の吉藏系正統を示すものとしては、現存の「浄名玄論略述」は五巻から成つてゐるといわれるが、その内巻才一本末、巻才二本末、巻才三本末、巻才五本等は現存してゐる、而して本書はかの嘉祥の「浄名玄論」を略述せるものである事及び今は現存してゐない「法華玄論略述」に就ては、聖岡の「伝通記料鈔」一に

「智光者南都元興寺人造浄土論疏五巻、此人受嘉祥法華玄作略述釈彼玄論云々」<sup>⑨</sup>

とあるをみて、嘉祥大師吉藏の正統を伝へた三論の学匠であつた事が伺へるであらう。

かように智光は三論宗にあつて、今問題としてゐる浄土教思想上に於けるその教法的地位、又その思想を、整理、研究するについて、先ず才一の手がかりとなる彼の論著である「無量寿經論釈」<sup>⑩</sup>五巻が問題となり、これを通じて彼の浄土教思想を究明する根本的資料である。かゝる根本資料たる「無量寿經論釈」の存在価値であるが、当時幾多の浄土教典籍の輸入等の問題と関連して考へられる事は、吾国に仏教伝来以来、特に浄土教関係經論疏の伝来は、すでに神龜四年（AD 727）の「阿彌陀經」の書写を始めとして天平年間に伝来書写されてゐることは、正倉院文書の書写関係文書に依つて知る事が出来るのである。<sup>⑪</sup> かゝる經論疏の伝来と實際の学問的研究のズレについては一考を要するが、ともかくも学問的関心の方向の一端が推察出来よう、

かような環境に於て、南都浄土經の教學的位置づけに於て、「論釈」(「無量壽經論釈」を以下「論釈」と略称する)自体のその価値は重要視されて来るのである。かくてその「論釈」自体の思想内容に限って考へられる場合、日本浄土教學形成の才一段階を代表するものと云つても過言ではなく、智光「論釈」の如きがどうして成立されて来る事が可能であるが、前述した浄土教論釈の伝来輸入と云う事又一般仏教的理解の進展に伴う、浄土教関係論釈の取り挙げは必然的に智光「論釈」の如きに現はしめてきた事が推察可能となるであらう。

### (三)

こゝで智光「論釈」の内容の問題についてその概略を考察すると、「論釈」は世親の「往生論」を曇鸞の「往生論註」を手がかりとして註釈したものであるが、かゝる場合智光自身に於て、その註釈を行うとき、曇鸞の思想によつてそれだけの思想的影響を受けているが、曇鸞は世親の著である「往生論」を註釈したものであつて、彼の思想が三論、四論、即ち龍樹の中觀仏教の思想に立脚していた關係上、中觀仏教の思想に依つて世親の瑜伽仏教の思想を理解することになったため、彼に依つて、中觀瑜伽の二大思想が打つて一丸とされ、それにもとづいて浄土教思想が論理的裏付けがされ、新しい浄土教思想が形成されたのである。かくて世親の「往生論」の觀察門中心の立場をそのまゝ継受しつゝ、而もそこに独自の解釈をする事によつて本願称名を強調した人である。しかる故日本浄土教史上に於て鎌倉時代の諸師は専修称名本願に高い評価を与えている。而して、さかのぼつて奈良時代の智光が、曇鸞の称名を如何ように評価したかについては南都浄土教に於ける智光研究上の重要な一課題と云うべきである。

かく考へるとき世親、「往生論」曇鸞「往生論註」を先づ依用したと云う事は、日本淨土教の形成全体に対しての意義はきわめて重要であると共に又南都への最初の受容の問題と関連して、この智光「論釈」の存在意義と彼の思想的地位は後世の淨土教思想展開の上に大なる影響を与へていることである（この問題についての論述は消略し他日の発表にゆずる）

さて「論釈」を中心に、その思想特に念仏、本願觀についてその一端を伺うに、先ず念仏については、「論釈」卷二に次の如くある。

「一心専念者念仏有<sup>レ</sup>二、一者心念二者口念心念亦二念<sup>一</sup> 仏色身<sup>一</sup> 謂八萬四千相等是念<sup>一</sup> 仏智身<sup>一</sup> 謂大悲力等也其口念者若心無<sup>レ</sup>力將<sup>レ</sup>口念<sup>一</sup> 仏令<sup>一</sup> 心不<sup>レ</sup>乱然杉<sup>一</sup> 専心常念<sup>一</sup> 阿彌陀仏名号<sup>一</sup> 有<sup>一</sup> 三種益<sup>一</sup> 一者由<sup>レ</sup>常念<sup>一</sup> 故諸惡尋伺畢竟不生亦消<sup>一</sup> 業障<sup>一</sup> 二者由<sup>レ</sup>常念<sup>一</sup> 故善根增長亦得<sup>レ</sup>種<sup>一</sup> 於見仏因縁<sup>一</sup> 三者由<sup>レ</sup>常念<sup>一</sup> 故薰習利臨<sup>一</sup> 命終時<sup>一</sup> 正念現前如<sup>一</sup> 經中言<sup>一</sup> 若有<sup>レ</sup>受<sup>一</sup> 持阿彌陀仏名号<sup>一</sup> 堅<sup>一</sup> 固其心<sup>一</sup> 境念不<sup>レ</sup>忘<sup>一</sup> 精進<sup>一</sup> 修<sup>一</sup> 集念仏三昧<sup>一</sup> 知<sup>一</sup>

彼如来常住安樂世尊<sup>一</sup> 相<sup>一</sup> 統念<sup>一</sup> 勿令<sup>レ</sup>断<sup>一</sup> 絶誦誦<sup>一</sup> 云々<sup>一</sup>とあつて念仏に二通りある事を説き、即ち、(イ) 心念、(ロ) 口念であり、心念に二意あつて、念仏色身（八萬四千の相）、念仏智身（大悲力是なり）の兩種を含み、口念とは無力な心を散乱せしめないため常に口に阿彌陀仏の名号を称へと称名を進めているが、これは心念に重点をおき称名はたゞその成就手段として用いよと云う意味ではなからうか、又常に阿彌陀仏の名号を念ずるに三種の益ある事を明し、

◎ ◎ 常念に由るが故に、諸惡尋伺畢竟して生せず、また罪障を消す。  
常心に由るが故に、善根を増表し、また見仏因縁をうることをうる。

◎ 常念に由るが故に、薰習熟利して命終時に望んで正念現前す。  
と説かれている。

かくて智光「論釈」の念仏觀は上述の通りであるが、かの迦才の「淨土論」オ三定「往生因」の条に於て論じている所は殆んど智光と異なざる事を領解して得るのであるかく考へるとき念仏に心念と口念とを立つる智光の思想は遠く曇鸞の「往生論註」を顧みつゝ、近く迦才の「淨土論」を承けたと見るべきであろう。

さて次に智光の本願觀についてみるに、

「無量寿經」所説の四十八願を

○ 攝法身願

○ 攝淨土願

○ 攝衆生願

の三門を立て分別立している。これはかの淨影寺慧遠の「無量寿經義疏」に出るものであつて、これを継承していると考へられ次のように考へられようか。

即ち智光は、淨影寺慧遠の「無量寿經疏」を読んでゐること彼がもつともその思想的影響を承けた、と見られる嘉祥大師吉藏が慧遠に順じて同じく三門分科を用いてゐる事等が挙げられる

しかしてオ十八願については  
「諸縁信樂十念往生願」<sup>⑦</sup>と云う願名を与へているこれは、「無量寿經」オ十八願の「十方衆生」を「諸縁」に配し、「至心信樂欲生我國」を「信樂」とし「乃至十念」を十念に更に「若生者」と以つて「往生」と呼んだものである。<sup>⑧</sup>しかして、この願文に就ても智光自体の考へ方、又、上述の念仏觀又は四十八願中、オ十九、オ二十各願の見方についても一層詳細に研究し、

又仏身論等残された問題が多々あるが本稿に於てはその一端を述べたのみで唯紹介的となつたが了承されたい。

(四)

かくて智光の「論釈」そのものは、当時の中国新羅等より将来された経論釈に関連する「無量寿経」註釈の傾向の線に連るものとみられるが、問題として提起されて来る新羅浄土教との関連性等を一層考へ合はせなくてはならない問題であつて上述したように智光自体の教学的地位又、「論釈」それ自体の思想上の地位を考へるとき、かくも仏教受容期に伴う浄土経論疏の輸入問題と関連して南都浄土教の教学の位置づけに、最初期とされる、智光の地位は「論釈」と共に大なる意義と価値を認めなくてはならない。

註

(一九五九、二、十六日稿)

(完)

- ① 東域伝灯目錄、日仏全一ノ六二頁
- ② " " 一ノ四七
- ③ 浄土依憑経論章疏目錄日仏全一ノ三四一頁
- ④ 東域伝灯目錄日仏全一ノ四六頁
- ⑤
- ⑥ 日本書紀二十三、国史大系本I四〇六頁
- ⑦ 望月信亨著「支那浄土教理史」一一四頁

- ⑧ 智光の伝歴に就いては、拙稿「元興寺智光伝について」仏大浄土学紀要才七号参照されまし  
 ⑨ 淨 全 三ノ六三頁

⑩ ①無量寿経論釈は古来散逸さしその全体を知る事が出来なかつたが、戸松氏「智光の浄土教思想について」  
 (大谷学報十八ノ一、四、十九ノ一)に復元発表されている。

② 本学恵谷教授は近年坂本西教寺蔵「安養果」(源隆国撰)に依つて復元、仏大研究紀要才三十四号附録として  
 所収

⑪ 拙稿「初期浄土教典籍の伝来について」浄土学紀要才六号参照

大日本故書正倉院文書参照

⑫ 恵谷教授著「大乘仏教思想史」一二頁(通信テキスト本)

⑬ 恵谷教授復元本、仏大紀要才三十四号附録一〇頁

以下「論釈」は恵谷復元本による

⑭ 迦才「浄土論」浄全六ノ六四〇頁

⑮ 慧遠「無量寿教義疏」上巻浄全五ノ二七頁

嘉祥「無量寿経義疏」浄全五ノ六六頁

⑯ 「広陳 四十八願 就 中有 三重 初正説願但此願分篤 三類 明 之有 三願 願 浄土 有 四十二願  
 願 得 眷属 有 三願 願 得 法身 三此三文不 聚在 一处 但随 義作 文身云々」  
 とあつてその三門分別の存在を実証する事が出来る。

⑰ 恵谷復元本二三頁

⑱ 戸松氏「智光の浄土教思想について」大谷学報十八ノ一、一四七頁以下